令和4年度 真備地区復興計画推進委員会 議事概要

1. 会議名

令和4年度 真備地区復興計画推進委員会

2. 開催日時

令和4年11月2日(水)14時00分～16時00分

3. 開催場所

真備保健福祉会館 3階大会議室

4. 出席者

(1)委員(19名)

神崎均委員、中尾研一委員、黒瀬正典委員、高槻素文委員、加藤良子委員、中山悍慈委員、土屋瞳委員、木口俊明委員、徳田智恵子委員(欠席)、加藤規郎委員、浅野静子委員、小田祐三委員、松王資子委員(欠席)、白神勇委員、中山正明委員、妹尾洋子委員、三宅隆司委員、三村聡委員(委員長)、加藤孝明委員、橋本成仁委員(欠席)、中西公仁委員、塩津孝明委員

(2)その他

オブザーバー(2名)

国土交通省 中国地方整備局 建政部都市・住宅整備課長(欠席)

国土交通省 中国地方整備局 高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所 所長

岡山県 備中県民局 建設部長

事務局(13名)

5. 傍聴者

0名

6. 報道機関

5社

7. 議事次第

1 開会

2 市長挨拶

3 委員紹介

4 議題

(1)真備地区の復旧・復興に向けた取組状況について

(2)真備地区における地域の活動について

(3)真備地区復興懇談会の開催結果について

5 閉会

8. 配布資料

次第、委員名簿、配席表

資料1　真備地区の復旧・復興に向けた取組状況について

資料2　真備地区における地域の活動について

資料3　真備地区復興懇談会の開催結果について

参考資料　倉敷市真備地区復興計画推進委員会条例

9. 議事概要 (◎委員長、○委員、■事務局・オブザーバー)

【真備地区まちづくり推進協議会からの主なご意見】

○ 災害時に役立つ防災備品を備蓄するため、キャンピングマットやレスキューシートなど、各種備品の備蓄を進めている

○ 現在、最後の建設型仮設住宅の撤去が進んでおり、入居者とは仮設住宅が開設した当時からのお付き合いで、最後までお見送りをした。ここでは、避難訓練や各種イベントも行うなど、1年を通じて地区の活動を共に行った

○ 当地区は、平成30年の災害で大きな被害を受けていないため、地区の防災意識が低いと思う。今後は、防災研修会を開催するなど、防災・減災の意識付けができるように地道に活動をしていきたい

○ 子どもたちを対象とした体験型のイベントや秋の交流会を開催した

○ 町内会単位の地区防災計画を作るため、防災セミナーや市の出前講座を活用している。早いところは既に策定するなど、地域全体で防災体制づくりを進めている

○ 三世代交流のタベの集いを開催し、約350名が参加した。また、昭和24年から毎年欠かさず開催している吉備真備公弾琴祭を今年も開催し、今年で74回目となった

○ 昨年に引き続き、今年も防災セミナーを計画している。また、昨年の防災セミナーを受けて、防災通信を作成し、「地区の防災組織の状況はどうなっているか」「避難場所はどこか」ということを住民に周知するため、地区の全戸に配布した

○ 当地区は、7月の第一日曜日を防災の日に制定しており、その日に防災訓練を行った。実際に災害が発生したことを想定し、自宅から徒歩で集合した

○ 三世代ふれあいと名のつくイベントを毎年開催しているが(夏祭り・体育祭・文化祭)、今年はコロナ禍ということで、ふるさと夏のタベというお祭りを行い、多くの方が参加した

○ 小田川の河川敷を拠点として、伝達訓練や(地域の方が各戸を回って安否確認)、電気自動

車を活用した訓練も行った

○ これまでは水害時のヘルプカードを作成していたが、今年度は地震時に使えるヘルプカードを作成して訓練を行う。ヘルプカードは、危険な場所や避難場所、誰が誰を補助するのかといったことを少人数のグループで話し合って記載するもので、併せて、避難ルートの見直しも行うなど、様々な取組を行う予定

○ 通学路の工事車両の通行について、通学時間帯を外すなど、時間制限ができないか検討してほしい

■ 安全に工事をしていこうと思っており、頂いたご意見について、現地を確認した上で対応させて頂きたい

○ 復興防災公園(仮称)の名称を皆さんから募集すると聞いていた。また、「希望のミチ」という名前についても市民の方々から募集して一番良い名前になると聞いていたが、どうなったのか

■ 現在、公園の設計を隈研吾氏が行っており、その中の街から川へ繋がっていく希望のミチという設計のコンセプトであり、必ずしもその名前になるものではない。公園の名称は公募する予定だが、詳細設計ができてからになるため、もう少し時間がかかると思う。今後、広報紙や連絡会等で報告させて頂く

○ コロナ禍で行事・イベントができないため悩んでいたが、子どもたちを楽しませるため、7月にわくわく祭りを開催し、しゃぼん玉遊びなどを行った。また、10月には地区の秋祭りを行い、3年ぶりに千歳楽を出して豊作を祈った

○ 防災マップづくりや地区防災計画の策定にも取り組んでおり、今年度中に取りまとめたいと考えている。また、今月には小学校で地区の防災訓練を予定しており、今回は車でも避難できる想定で行う

○ 復興防災公園(仮称)について、そろそろ工事が始まると思うが、本日の資料 P15 に建屋には真備の復興状況や歴史・伝承等、様々な展示が可能なスペースを確保する旨記載されている。7月1日～7月4日には、まび創成の会とまちづくり推進協議会連絡会の実行委員会が水害伝承の展示会を開催し(1，800名以上の方が来場)、写真等の展示で平成30年7月豪雨災害当時の厳しい状況を見て頂いた。やはりこの水害を若い世代へ伝承する、この真備の水害の歴史を次世代に伝承するために、公園内にもそういう施設ができると思われるが、どうか

■ 真備の復興や災害の歴史を伝承することは大切なことだと認識している。公園の中に展示ができるものについては検討していると以前からお伝えしている。伝承することによって子ども達や次へも繋がっていくと思うので大事にしていきたいと考えている

■ これまでの災害の記録や記憶を次に繋げていかないといけないと思うが、建屋の中で1つの部屋を専用でずっと使うのは難しいかもしれない。真備の方だけでなく、公園が完成したら全国から視察の方もたくさん来られると思うので、ここでしっかり勉強して自分の所の防災に繋げてもらえるような伝承という意味も含めた展示等ができればと思う。また、視察に来られた

方への講演、防災のワークショップなどもできるのではないかと思っている

○ 災害以降、バラバラになった町内会の復活に向けて、令和2～3年度にかけて「町内会どうなっている会」を開催した。そこでは、それぞれの課題を話し合い情報交換しながら、みんなが戻って来られる環境づくりをすることで、現在は多くの方が戻っており、世帯数は被災前と変わらない状況になっている

○ 防災の取組としては、黄色いタスキ大作戦をしている。いざとなったら命を守るためにみんなで逃げようということと、伝達訓練を兼ねて実施している。小学生は「防災まち歩き」をして、地区の歴史や危険な場所について楽しみながら学んだ

○ 様々な防災の取組を行っているが、自主防災会の組織率が低いため、今後は地区全体として取り組んでいきたいと思う。地区防災計画も町内会単位で策定することは大変難しいが、色々な方の力を借りて来年度に策定できればと思っている

【公共的団体などからの主なご意見】

○ 災害以降、若手として何ができるのかを考えて活動してきたが、コロナの影響もあり、復興という言葉が薄れてきていると感じた。災害直後から真備の方を元気にできたらという思いで復興阿吽祭というお祭りを開催しており、今も続けている。仕方なく真備を出られた方もいるが、そのお祭りの日に帰って来てもらう、遊びに来てもらうきっかけになればと思う。また、お祭りにより地元の商工業者も潤う。少しずつだが、頑張っているところを見てもらえればと思う

○ コロナの影響で活動できていなかったが、今年度から徐々に活動を始めた。街並みを見ても家が増え、復興が進んできたと感じる

○ 災害を受けた事業所がたくさんあり、グループ補助金等の申請が昨年の1月に完了した。その後はこの体験を活かしてBCPの策定を進めたい。この地域でBCPの認定を受けた事業所の数は県下の20商工会の中でもトップであり、それを強めていこうと思う。こんな貴重な体験をした事業所が本当に強い思いで這い上がってきて、その後、コロナで二重の苦しみをしながら防災に備える、いわゆる事業を継続するための強みを如何に確保するか、備えるかということ。現在15社近くが認定を受けてセミナーも毎回開催している

○ 中小企業、小規模事業者を活性化するためにどうしたら良いかを常々考えているが、プレミアム付き商品券を来年計画している。それによって商工業者も住民も活性化する、あるいは楽しんで頂いて、事業所を中心に町内が明るく元気になってもらいたい。また、来年は商工祭も久しぶりに開催できると思うので、それに向かってやっていきたい

○ 災害が起きて数年は田んぼを造成して家を建てる計画がたくさんあったが、今現在はそういった事案がほとんど出てこないため、だいぶ落ち着いたのかなと思うが、周りを見渡すと元あった家がなくなり、空き地になっている所が多々見られる

○ 農業者が災害後に農業ができなくなり、引っ越したことで、田んぼが荒れる。そのため、担い手を探す仕事をしているが、高齢化により地元の方にやってもらうことは難しく、会社組織で農業をしているところにお願いしている状況

○　子ども達はお祭りを非常に楽しみにしている。コロナで学校内でもそうだが郊外でも遊びが制限され、子ども達にはストレスがかかっている。地域の方々にお祭りを開催してもらい、子ども達は喜んでいる

○　親からすると、今でも梅雨時期になると心が不安になる。その中で子ども達に、このまま真備に住んでほしいかというと、まだ不安なところがある。でも、自分達が住んでいるところは、好きになってほしいということから、「防災まち歩き」を考えた。まずは、自分達が住んでいる地区の歴史や防災の取組について知ってもらう事が大切と思い企画した。これが好評だったので、学校からも3世代の計画として、また来年もやってほしいと言われている。子ども達はまだ歩き足りないということだったので、今後は中学校区にエリアを広げていきたいと思う。しかし、全ての地区が集まって協働で何かをすることは難しいため、まちづくり推進協議会にも相談させてもらいたい。とにかく、親としては子ども達に真備を好きになってもらいたいという思いがある

○　新しく完成した岡橋東側の交差点で子ども達の見守り活動をしているが、車が交差点で渋滞し、そこへ中学生が自転車で合流するため危険な状況。現在、ごぜ橋と有井橋が通行止めになっているため、岡橋の交通量が増加している。早く有井橋を開通させてほしい。また、工事の影響で通学路を登校時と下校時で変更しているが、工事車両も増加しており、子ども達が事故に合わないか心配している

■　有井橋の工事は、今年度末の完成予定だが、一日でも早く大幅に前倒しして供用できるように頑張っていくため、もう少し見守りをお願いしたい。また、末政川の上流の方では来年度末の供用に向けて工事をしており、大型車両も多く通行しているため、請負業者等にはしっかりと安全にできるよう指導したい。そのため、我々と見守りの両方で安全になるように協力してやっていきたいと思う

◎　私は前任校では通学路の交通安全の分析をしており、通学路の安全対策については今までの蓄積もあるため、現地にご一緒することも可能。現地に行かないと分からないこともあるため、科学的なものを使ってどういう風に子どもの安心安全を守っていくのか、大切な話になってくるので、必要がありましたらお声かけ頂きたい

○　今年度から町内全箇所で年会費のお願いができるようになり、ある程度復興が進んだのではないかと認識している

○　災害は本当に大変だったが、その災害によってすごく変わった町内会がある。他県からもインタビューを受けた。ある町内会は高齢者ばかりで空き地が点々としており、そこへ災害がきて、空き家については撤去された。その後数年が経過し、若い人達が来て新しい家が点々と建ち子どもも増えた。災害前は子ども達が数人だった町内会が、今では15人に増え、少子化の流れの中で信じられない町内会ということで紹介してもらった

○　今年はコロナ禍での公民館・分館の使用制限がなかったため、かなり活動をしている。100才体操、グラウンドゴルフの練習、料理教室、手芸の会、神社の清掃など、社会活動に参加することが皆さんの健康長寿や地域の活性化にも繋がっていると認識している

○　災害が起きた後に市長の迅速な行動力もあって、また、地域の皆様、倉敷市民の皆様、その他多くの皆様の行動力で第一歩が早くできたと市議会としては認識している。そうした中で、各議員も地域の皆様との繋がりの中で個々に意見があり、職員も大変困った部分があった。そうしたことも踏まえて、市議会の中で、災害時の対応について議論を深めた。具体的には、災害時には議会は開かれていないため、執行部の対応を全幅の信頼でやってほしいということで認めてきた。そういうことが、地域の皆様にとってどうだったのかを反省しなければならない。国交省や県の関係について、報告だけを受ける議会であったので、そうではなく、瞬時に議会としての答えを出していくという思いでいる。また、地域コミュニティの復活について、地域集会所がなぜ10割の負担で復活できないのかということを申し上げたが、倉敷市の市民活動の中での制約もあり、真備町だけ特別というのは難しいこともあった。しかしながら、市長の英断もあり、半額ではなく、もう少し補助率を高めて一日も早くということになった。今日も見せて頂いたが、何箇所か綺麗なものができている。そうしたことが、自分たちの町内だけではなく、真備全体で一緒になって、一つになって頑張って行こうという姿を見せて頂いて、議会にもその思いを伝えて頂ければと思っている

【委員長・学識経験者からのご意見】

○　委員の皆様の意見を聞いて、あらためて着実に復興が進んでいることを感じた

○　復興の「バネ理論」というものがあって、これまでは被災してバネが縮んでいた状態だが、縮むと良い形で飛び出すこともできる。復興する時に被災した経験でエネルギーが溜まって、今それが弾けようとしている状態だと思う

○　被災すると、それぞれの立場で色々悩んで、色々考えて色んな工夫をしていると思う。これは全ての人がしていると思う。全ての人がバネにエネルギーが溜まっている。一部の人が頑張るという話ではなく、みんなが頑張れる状態にあると思うので、そのエネルギーを如何に地域で上手く活かしきるかということが、今後の創造期に良い形で繋がっていくと思う

○　防災まちづくりや復興まちづくりについて研究しているが、全国まちづくり協議会や防災国民大会などの全国大会で真備の方々に会いディスカッションする機会があった。恐らく、本委員会には出ていない様々な動きがそれぞれの地域で出ているので、それをもっと表に出して良い形で地域全体が跳ね返られるようになれば良いし、その素地ができ上がってきていると思う。是非色々な活動に目を配って、それを大きな力にもっていくと、もっと良くなると感じた

○　今回の水害の特徴として、全員が同じ体験をしている。地域として同じ経験をしているため、一体感がある。共助という言葉は単に助け合うとか避難する時に呼びかけるだけじゃなくて、自分たちが持っている何かを持ち寄って、地域として役に立つものに変えていくことが新しい共助だと思う。ですから、「持ち寄りの共助」ということを頭において、新しい共助の形を作る素晴らしいチャンスだと思うので、是非その方向で検討して頂きたい

○　復興状況に関する住民アンケート調査の結果（資料1・P28）について、「災害直後と比べて記憶が薄れているように感じる割合」が8割と記載しているが、市はどのように考えているの

か

■ 両面あると思う。災害の時の苦しい思いが、少しずつ元の状態に戻ってきたと思われている方が多い反面、災害の経験が薄くなったら今後困るという思い

○ 基本的には記憶が薄れていく方が自然な流れだが、忘れてしまうと次に大変な事になってしまうので、忘れても良いが、次の世代に向けて何を引き継ぐべきかということを地域の皆さんと議論した方が良い

○ 先程も説明があったが、外から新しい人が入ってきている。これがとても重要で、新しく引っ越して来た人は水害の体験をしていない。そういう方が増えていく中で、地域の中で水害の経験が忘れ去られてしまう可能性もある。引っ越して来た時にこの経験を共有するということは地域でしかできないので、ぜひお願いしたい

○ 復興防災公園(仮称)に期待感を持っている。基本は防災に焦点を当てているが、川の近くにあるので、川に親しむという所をもっと活かすと良い。以前も説明した県外の事例では、水害の危険性のある所でまちづくりを18年くらいやっているところがあり、地域の方から「浸水」と「親水」という言葉が出てきた。その言葉が何故出てきたかというと、毎回リスクの話ばかりで面白くない、もっと楽しい事はないか、せっかく川の近くに住んでいるので、水に親しもうという話だった。よくよく調べると、普段、川に関心を持って暮らしている人は、自ずと浸水リスクに対する意識も上がる。そのため、公園の空間を通してできる限り地域の人たちが川に関心を持つ、水に親しむという生活スタイルをこの真備の中に定着させていくと、知らず知らずのうちに浸水リスクに対して意識の高い地域が継続していくと思う

○ 流域治水について(資料1・P26)。国や県が取り組むのではなく、みんなで取り組む流域治水。川だけでなく山や市街地、地域社会など全部含んで流域治水。その流域にいる皆で一緒に取り組みましょうというもの。今回の工事で川の容量が増えたため、同じ雨が降っても次は大丈夫だが、今後気候変動が進むと、川の容量を超えた雨が降るとどこかで溢れてしまう。その溢れた水を流域全体でどう処理していくのか、ということが流域治水。それぞれの地域の特性に応じてそれぞれの役割がある。流域全体がある種の運命共同体のような感じ。通常は防災教育というと早く逃げようという話になるが、そのレベルではなく、もう一段上のレベルで運命共同体として、この地域の防災文化を作っていくんだという、それくらいの高いレベルを目指して地域で防災教育をしていくと良いと思う。現在、千葉県の小さい流域で流域治水に携わっているが、その地域は運命共同体意識が定着している。3年前の水害で上流の農村は大きな被害を受け、同じ雨が降るとまた同様に大洪水が起きる。そういう状況に対して、上流に住む人は、普通は川を改修して早く下流に流してくれと言うが、この地域はそうじゃなくて、「地形からくる上流の責任がある。速やかに流すと中流で大きな被害が起きてしまうから、上流の役割として、田んぼで水を受けて、できる限りゆっくりと下流に流すことが私たちの役割だ」と言っている。役所も住民の方も同じことを言っている。このカッコ良さを超えるような防災文化を作って頂ければと思う

◎ 高梁川流域7市3町の防災の連携は相当進んでいる。我々も花見山の高梁川の最初の一

滴を見て、今は酒津に行ってから水島を学ぶという教育プログラムを組んでいるが、復興防災公園（仮称）ができたら、ここを拠点にしながら7市3町で本当の意味での流域治水の教育もできるのではないか。今日はキーワードとして「浸水」と「親水」、「持ち寄りの共助」という高い示唆を頂いたので、そういったものを具現化できるように今日お集りの皆様方で頑張っていきたいと思うし、いよいよ来年度は仕上げの年に入る。ここまでの歩みというものは本当に皆様方のお力で進んできたものであり、それを全面的に市や県・国などがバックアップし、災害が起きる前に戻すのではなく、更に新しい地域を作っていくことが最終ゴールだと思う

【市からの主な発言】

- 市としては、この水害の経験を市全体の防災力の強化に繋げていかなければならないとずっと思っていた。現在は、市内の全部の小学生・中学生が学校で防災について学び、それを家に持って帰って親と共有する体制にしている
- 今後は、様々な方が真備へ視察に来たり、逆に、真備から自分達の地域に来てもらって、防災のことを教えてほしいのではないかと感じている。今後は、この経験を他の地域も含めてみんなで共有し、防災の備えに繋げていきたいと思っている
- この災害の経験を踏まえて、災害前のまちに戻るのではなく、元のまち以上になるようにみんなで頑張りたいと思う

会議録の内容に相違ないことを確認し、ここに署名します。

令和5年1月25日

委員長 三村聡 印

署名委員 高槻素文 印